

高崎の観光 再発見 vol.3 頼政神社



頼政神社



高崎の祭りは冬祭り

関八州屈指だった頼政神社のお祭り

江戸時代から戦前まで、高崎の冬の風物詩は、お祭りと山車だった。

高崎公園の南に、武将であり歌人としても名高い源頼政(1104~1180)を祀る「頼政神社」がある。現在地の頼政神社は享保三年(1718)に建てられた。高崎城主・大河内輝貞公が、遠祖の源頼政を祀るために創建し、境内は国道側に今の何倍もあった。敷地に、今年生誕150年の内村鑑三の「上州人」碑がある。

頼政神社のお祭りは、毎年3回、正月、五月、九月に行われた。正月二十六日の祭りが特に盛大で、高崎藩の威信を放ち、上州一であり関八州屈指のお祭りだったという。現存する絵巻には、幟を掲げ、神馬や神輿、獅子舞、飾り屋台など350人の華やかな大行列が描かれている。祭り行列や飾り屋台は、お堀端から田町、九蔵町、本町を通過して赤坂まで行った。この時に曳かれた飾り屋台が、現在の雅やかな高崎の山車のルーツとも言われている。

道祖神祭り

頼政神社のお祭りが行われるようになってから、小正月の道祖神祭りが、正月二十六日に同時開催されるようになった。150年以上続いた頼政神社のお祭りは、武士の時代とともに終わり、山車が出されたのは明治2年までだったという。頼政神社のお祭りが無くなったため、一月十四日に道祖神祭りが単独で復活し、ここで山車を出すようになった。

記録では、明治以降の道祖神祭りは、小正月の子ども達のお祭りで、飾り終わった松飾りを集めて町内ごとに松小屋を作り、中で餅を焼いたり、太鼓を叩いてお囃子で遊んだという。夜になると大人もお囃子に加わった。「うるさい」と苦情もあったようで、明治13年の記録

では、役場から通達が出るほどだった。

13日が祭りの本番で、あちこちから山車が町中に一斉に繰り出す。辻で山車が行き合うと、お囃子バトルが繰り広げられた。祭りは夜半過ぎまで続いた。14日に松小屋を壊し、それを燃やして「どんど焼き」が行われた。戦時下の昭和14年頃に道祖神祭りは中止され、以降すっかり行われなくなってしまったという。

「高崎ふるさとまつり」で再復活

保有台数日本一と言われる高崎の山車も、戦後は定期的な出番を失った。電線や交通事情など社会的な要因で、山車を運行できる場所が限られ、戦前のように好き放題に引き回すこともできなくなった。

昭和50年の「高崎ふるさとまつり」(11回目から高崎まつりに名称変更)で、高崎の山車は、夏のイベントとして復活する。第1回目は23台が出場した。後に市内東西南北の地域が一年おきに出場する輪番制となって、現在は高崎山車祭り保存会が「高崎山車まつり」として実施している。

高崎のまちをあげてのお祭りが「夏祭り」になったのは「高崎ふるさとまつり」からで、歴史を紐解くと、元々大きな祭りは冬祭りだったことがわかる。



高崎まつりの山車